



2019 (令和元) 年7月1日 (月)

藤 棚

第370号

狭山ヶ丘学園 学校通信

<http://www.sayamagaoka-h.ed.jp/>

<http://www.sayamagaoka-h.ed.jp/js/>

強さと逞しさを失った現代人の行く手

校長 小川義男

親が、夫婦揃って子を虐待する。母が命がけで庇わねばならない場合にも、夫(父)と共に虐待に加わる。多年引き籠もりを続け、筆舌に尽くしがたいほど恩を受けている高齢の父や母に暴行を恣ほしいままにし、果ては殺害に及ぶ。夫が力のない妻に暴力を振るう。これでは人間どころか、獣にも劣る振る舞いである。

考えさせられるのは、私たち日本人が、どうしてこれほど耐性のない、我慢する力のない人間に育ってしまったのだろうかと言う事である。

アフリカや東南アジアの人々は、そうではないのではないか。生徒諸君は、自らを、どのように認識しているだろうか。

思うのだが、諸君も、諸君のご両親も、これまで、どこで、どのように耐える訓練を自らに課した経験があるだろうか。

貧乏を自慢するのではないが、私は、大学四年の秋の頃、死に勝ると言って良いほどの貧しさを体験した。私は「学生運動」の世界で、人に知られた人間であったが、生活は苦しく、政治活動は止めて、アルバイトに専念したいと考えていた。しかし、北海道学連の委員長は、誰にでも勤まる仕事ではない。結局、仲間が「小川義男君後援会」というのを作り、一口50円ずつ集めて、月額7千円を私に届けてくれる事になった。珍しいことではない。後に全学連委員長になった唐牛健太郎くんの生活費は、重役の子息であった、灰谷慶三くんが負担していた。灰谷くんは後に北大の文学部長になった人物である。若くして死に、今は世にない。

当時の全学連の活動は、原水爆禁止と戦争防止に終始していたと言える。そこに、あるグループの思想的分断工作が持ちこまれ、後援会の担当が、反小川派の人物であったため、後援会の活動は破綻した。当然、私への支援はゼロになった。そこへ姉が結核で倒れ、手術の末に急死した。大工の父には、仕事が一切ない時代であった。

人間、本当に苦しいときには、10円の金も貸して貰えぬものである。あの時が私の一番苦しい時であったろうか。婚約者は裕福な家庭の娘であったが、彼女に苦衷は語れない。

近所の人々に助けられ、葬式だけは何とかやりおおせたが、あの時の辛さ、苦しさは、今も忘れない。

「強さ 逞しさ」を育てるものは、逆境とは限らないが、逆境が強い人間を育てるというのも否定しがたい事実である。

その意味では、現代、高校生は、恵まれすぎた環境に育ってきたと言える。私が生徒諸君に、ディズニーランドや、お膳立てされている炊事遠足などではなく、山登りを課しているのは、そのためである。

もっとも、高校一年生には、入学当初に赤城山荘に宿泊し、鍋割山登山をさせるのが、数十年前の本校の伝統であった。

しかし諸君は、登山以外に重い荷物を持った経験は、ほとんどないのではないか。部活動の凄さは、このあたりにある。

吹奏楽部、彼ら、彼女らが、外部演奏のため「大荷物」を運ぶ姿に、私は感動する。式場準備に彼女らが、男子と共に活動する姿は「これが女か」と、目を疑わせる程に「勇ましい」。ここに、吹奏楽部の良さと強さの本質があると私は思う。

運動部が、自らを鍛えるのに、厳しい集団であることを知らぬ者はない。あの鍛え抜いた筋骨は、生涯の宝となるであろう。

文化部、例えば書道部は「静」の典型と思われがちだが、部活動を進めるためには、相当量の作業が必要となる。これら全体が、諸君を、「強い人間」に育てるのである。

しかし、何と言っても、中、高校生を鍛え上げていくのは、「学問」であろう。

学問で成果を上げるには、莫大な忍耐が必要になる。昔は、眠さとの戦いが、よく指摘されたが、今日ではテレビやゲーム、スマホなどが学問を妨げる主敵として登場する。

高校は義務教育ではない。やめたければ、明日やめても、どこからも文句を言われぬ教育機関、諸君は、そこの生徒と言う事になる。

中には、通学制の学校を嫌って通信制の「のびやかな学校」に移籍する人もある。折角、努力して、「これほどの高校」に在籍しているのにと私は残念でならぬが、高校は義務教育ではないのだから、そのままやめても、少しも違法性はないのである。

だが、私は思う。「それで、その生徒は、強い人間に育てるだろうか」と。

高校三年生は、今なら、勉強次第では、どの大学にも進学できる。だが、夏休みが終わり、秋風が吹く頃になっては、その可能性は薄くなる。今だ！ 今が、そのラストチャンスなのだ。

大学には、「門の広い大学」と「門の狭い大学」とがある。入りやすい大学は、卒業した後、社会の多くの分野に進出する上で、容易ではない。「力を尽くして狭き門から入れ」と、私が呼びかけ続けているのは、そのためである。

豊かな現代、苦勞せずに生きられる現代も、諸君が大人になり、家族を抱えて生きて行く上で、安易な世界ではない。

スポーツに燃えた諸君は、この夏からは、学問、文化に燃えよ。学問中心に生きてきた諸君は、一層厳しく燃えると共に、散歩、駆け足等の形で、体力をも養うことに心がけよ。

学問も運動も、豊かで安楽に生きてきた諸君を、耐える力のある人間に育て上げる、数少ない手法なのだということを分かって欲しい。

また、安全にも特に気を配ってな。